

『よしあし草』の俳句欄

宮 本 正 章

った投書雑誌の投書家の青年達により組織された会であった。

浪華青年文学会の中心的人物は、春雨中村吉蔵、梅溪高須芳次郎であったが、梅溪が明治三十一年（一八九八）に上京した後は、酔茗河井幸三郎が参加して、会の改革を積極的のうち出し、会の名称も関西青年文学会に変更することを提案し、会の下部組織として、堺支会を設立し、この地の文学青年達を糾合して青年文学会をバックアップするようにした。

『よしあし草』・『関西文学』とは、明治三十年（一八九七）四月三日に難波の翁亭で第一回の会合をもった浪華青年文学会（後、関西青年文学会）の機関誌として、『よしあし草』は、明治三十年七月十八日に第一巻第一号が刊行され、明治三十三年（一九〇〇）六月十五日第二十六号で終刊し、『関西文学』第一号は、明治三十三年八月十日に発刊され、明治三十四年（一九〇一）に第六巻をもって廃刊になった雑誌であった。

浪華青年文学会とは、少年園（後にに内外出版協会と改称）発行の『少年文庫』（明治二十二年、一八八九発刊）や、これを改めた『文庫』（明治二十八年一八九五～明治四十三年一九一〇）、『青年

文』（明治二十八年一八九五～明治三十年一八九七）、博文館発行の『少年文集』（明治二十八年一八九五～明治三十一年一八九八）とい

の、この第二十六号をもって終刊となった。

しかし、大阪残留組の小林天眠や中村梟庵は、このまま廃刊する意図はなく、東上組の高須梅溪、中村春雨の助力を得て、矢島誠進

堂書店の『わか紫』と合併し、『関西文学』と改題して、明治三十三年八月にその第一号を発行した。この『関西文学』も第六号で休刊宣言をし、ついにそのまま廃刊となった。『よしあし草』第一号から数えて、誌齡第三十一号であった。

浪華青年文学会の会員達はすべて無名の青年達であった。文学的にやや知名であったのは、『文庫』記者河井醉茗で、それさえも、本業は堺の老舗の河又呉服屋の若主人であった。幹事長の中村春雨も幹事の高須梅溪も大阪郵便為替貯金管理所の書記補であり、評議員で常に会の経済面を助けた小林天眠は、毛布問屋西村喜八商店の店員であり、後には小林商店の主人であった。他の会員達も似たりよったりで、文学に対する“鬱勃たる情懷”^①をいだきながら、世に立つ方途を求めている若人達であった。

『よしあし草』・『関西文学』が無名の青年達によって、文化的事業に冷淡な大阪でかくも長期間にわたり、かつ、廃刊時には「大阪以外各地に渉り十数の支部を有し会員数も千二百を算えて居た」という発展ぶりをみせたのは、明治文学史上特筆すべき事柄といえよう。

二一

『よしあし草』の構成は、たとえば、第一巻第一号（明治三十年

十一月）をみると、「時文、小説、雑録、彙報、詞藻」となっていて、その詞藻欄に「新体詩」「和歌」「俳句」「漢詩」が入っている。新体詩と和歌はこの第一号から掲載されているが、俳句は表紙裏に、「懸賞俳句募集」とあって、「題随意（夏季）一人一句限 天地人三名に粗景を呈す 投稿ノ限り 八月十五日」とあるのみで、見ることはできない。

さて、この懸賞俳句は、第二号（明治三十年九月廿五日）の懸賞俳句募集によると、「前号募集の懸賞俳句は応募者僅に三名なりしに依て更に募集する事となしぬ」となっていて、題随意が秋季冬季混題となり投稿締切が十月十五日となっている他は前号同様の文言である。一方、この二号には、「俳句欄があって、「編輯局選」として、「俳句は尾花庵宗匠の選なる筈なりしも時日切迫の爲め止む得ず編輯員の選む所となれり会員諸子請ふ諒せよ次号以下本楽天居小波宗匠尾花庵宗匠その他名家を煩すべし」と断り書きをして、「四季混題」のもと、七十句が並んでいる。思うに、編集部としては、懸賞募集俳句と会員寄稿の俳句の二本立を企画し、懸賞の方は前述の如き理由で載せられず、会員達の寄稿のみを掲載したのであろう。選者として予定していたという尾花庵宗匠という俳人は不明であるが楽天居小波宗匠は巖谷小波のことで、彼は新派俳句の会、秋声会に属していた。これは、弁護士角田竹冷の発案で結成された集

③ 団で、尾崎紅葉も加わっていて「俳諧の風雅に遊ぶ」④ ことを目的とする遊俳会であった。お伽噺の大家として著名な小波山人が、選者としてあげられたのは、『よしあし草』第二号で会頭となった中尾鷲夢の推薦によるものであった。鷲夢中尾米治郎は、大阪実業学館（簿記中心に英、数、漢文を教授した私立学校）が発行していた『文学評論』の編輯者であり、同誌を中心に結成された大阪文学会の役員であった。彼が会頭の地位を与えられたのは、浪華青年文学会の中村春雨や酔夢西村真次が大阪実業学館の学生であり、また『文学評論』の常連の執筆者であった縁であろう。中尾鷲夢は、大阪朝日新聞派の文士須藤南翠、渡辺霞亭、加藤紫芳、磯野秋渚等や大阪毎日新聞派の菊池幽芳、香川蓬洲等を浪華青年文学会の客員や賛成員とすると共に、東都文壇の幸田露伴、尾崎紅葉、逍遙といった著名文士を客員に迎えようとした。そうした動きの一つとして楽天居小波宗匠があがったのである。こうした俗臭芬々たるやり方を鷲夢も気にしてか、「想ふに青年気英の士或は大家なる称号に、憐焉たるの念を懐くあらん」といい、「然れども想へ、予は敢て、所謂大家たると否らざるとを問はず、文学界に於ける先進者にして、東西文壇に知名の士は、必ずや幾多世界の功績を把持するものたらんばならず、又必ずやそが経験上本会を益するある亦弁を俟たず、これ本会の喜んで這般の諸士に、客員たらんを請はんとする所以な

⑤ り」と弁明している。しかし、彼が懸念したとおり、高須梅溪と対立を生じ、その上、會計上で問題も起こし、第三号（明治三十年十一月二十日）では、会が鷲夢会頭と決然関係を相断った旨の広告がみえる。こうした中尾鷲夢退陣によって、小波宗匠選者起用案もあつてなく立ち消えとなった。旧派の尾花庵宗匠も同様であつたらしい。第三号には、代りとして、「俳句は新派（別天楼氏）に旧派（笹の家氏）に選抜を請うたこと、笹の家氏の方分ハ終に印刷期日⑥ の間に合はず、依て這回は別天楼撰抜の儘掲げ」ることとなつたと、よつて、「旧派諸子次号に此缺を補ふべければ悪しからず掠察」してほしいとみえる。今回は、初めて真正正銘の新派（日本派）俳人野田別天楼が登場したのである。笹の家という旧派の俳人は未詳であるが、当時の大阪の旧派の代表的宗匠は黄花庵南齡、破笑庵卓志、馬田江公年といった人々であつたというから、そのいずれかの門に属した宗匠であつたのだろう。

野田別天楼は関西における日本派の有力作家であつた。日本派とは「正岡子規は、明治二六年二月三日から新聞『日本』に俳句欄を載せ、俳句革新運動を展開、次第に集团的勢力をもつに至つた。明治二八年、岡野知十はこの趨勢に対して『日本派』と名付けた。翌二九年、角田竹田竹冷の『毎日派』に対して、この呼称が確立」⑦ と説明されるものであつた。正岡子規のこの俳句革新運動が成功し

た理由を、大阪における日本派の一人でもあった高須梅溪が、(一)俳句の芸術的意義を明らかにし、(二)取材の範囲を拡げ、(三)格調を自由ならしめ、(四)自然、人事に対する新しい見方と新しい写生の方法とを教へて行詰った旧生命のうちに囚はれて居た俳句に新生命を賦与したことを、にであったと言っている。^⑧

さて、関西における日本派の運動は「知恩院桜門前の茶店で、初めて満月会を開いたのが、明治二十九年八月の満月の日で二十年前のことである。これが京都へ日本派の俳句を伝へやうといふ同志会の発端^⑨」であるといわれるように、京阪俳友満月会の発会に始まる。

その趣意書に、京阪とするが「京阪をもつて限るにもあらず」といひ、俳友は「『日本』紙上に寄稿せらるゝ同志を以てするの謂ひ」であり、満月会は「俳友が満月の夜を以て相会すと云ふ外に意味ある無し」といった会であると説明されている。発起人は、大阪の水落露石、京都の中川紫明（四明）、寒川鼠骨の三人であった。会員は瓦全、別天楼、不落、翠竹、由攀、桃右、無心、虚吼（以上大阪）。瘦石、涙骨、鼠骨、青嵐、緑、煙村、寒月、文芽、菰堂子、四明（以上京都）であったといふ。^⑩この京阪満月会を母胎にして誕生したのが、大阪満月会であった。青木月斗によると、「京阪満月会が分離して京都は京都、大阪は大阪と独立したのは両者共稍盛んになつて来たためであった」といふ。明治三十年三月七日の第六回

京阪満月会（茶白山・泰清寺）に出席した四明、瘦石、瀾水、緑（以上京都）露石、瓦全、別天楼、翠竹、不落（以上大阪）によつて議せられ、翌四月四日、発会式がもたれた。以後、最も忠実に大阪満月会の世話をしたのは野田別天楼であった。

大阪満月会の野田別天楼が『よしあし草』俳句欄の選者となつたのは、浪華青年文学会の会員に満月会に所属する鈴木疑星、前田村村がおり、その縁で別天楼が招かれたものと思われる。彼は明治二年（一八六九）五月二十四日、岡山県邑久郡国府村大塚に生まれた。本名を要吉といひ、弱冠郷を出て関西の地に教鞭をとつたといふ。^⑪

彼の新聞『日本』への初登場は明治二十九年三月十一日であった。^⑫別天楼選の第一巻第一号には、彼の指導下の疑星、孤村といった大阪満月会員の他に、高須梅溪、中村春雨、小石青麟、中山琴風等浪華青年文学会の役員達が出句しており、別天楼をもち立てようとする意図がよみとれる。選者自身も五句出句している。

池越に山茶花見ゆる藪の中

納屋の横に蕪菁干したり野の小家

茶の花に白き虫飛ぶ黄檗寺

水涸れて谷は落葉に埋れぬ

白足袋の古びたるを嘆ず村夫子

彼の師子規の「俳句は実景を写さんと心がくべし」^⑬を忠実に守つた

句柄であり、温雅にして平明な句である。新派の実力作家別天樓の参加は、会員達に俳句熱を生み出したらしく、明治三十一年十一月三日の難波の翁亭での秋期大会には、別天樓も参加し、課題を出し、参加者達の句を選んでいる。春雨、梅溪、小橘、孤村、疑星、泉舟等の句が掲載されているが、ここにも会の幹部達が積極的に新派俳句にとり組んでいるさまがうかがえる。こうした姿勢は次の二巻第一号（明治三十一年一月）の雑録欄にも現われていて、藻蒲生の「窃かに俳諧を憶ふ」という論文は、芭蕉の俳諧を称揚し、「嗚呼誰か翁の衣杖を伝へて高く明治の野に叫ぶ者ぞ、俳壇悲雲日に多く、徒らに古人の狂を学んで自ら得たりとなす人はあれども、彼が所謂風雅なるものを捕へ来てつて自然に遊ばんとする者抑も幾人かある噫々」といったもの、梅溪孤客の「冬期の自然美」は「冬期の美は幽寂清高の特趣を存するにあり。而して其妙其麗是を他の春夏秋の三季に比して聊かの遜色なく否寧ろ其上にありと云ふも過当に非ざるなり」と冬の美を賞揚して、その精緻な観察を勧めるものであり、日本派の視覚によつてとらえた美的事物を詠むという行き方に資せんとするものであろう。安藤橡面生の「梅花四事」もいささか術学的すぎる小文だが、右の梅溪と同じ意図によつて書かれたものであろう。ちなみに、椽面坊は明治三十四年以降、大阪毎日新聞の「毎日吟壇」の選者となり、関西俳壇の発展に貢献した日本派の俳人であつた。

⑤ 日本派に属すといえ、京都満月会の熱心な会員である永田青風が投句している。当時は第三高等学校法学部の学生であつた。この号には、蝸牛会俳句の欄があり、孤村、蓬月、羽仙、淀南、閑鷗、圭虫、香風、颯々、鉄骨、非石、別天樓の句が並んでいる。末尾の別天樓の句は六句もあつて、彼の指導する句会ということがわかる。前書に「こハ我会員諸氏の組織より為れる蝸牛会諸氏の吟なり、今後毎号披露して浪華俳壇に一異彩を放たしむとす」とあるから、浪華青年文学会の会員達をもつて組織した会である。別天樓の活躍により、旧派は『よしあし草』誌上から駆逐されたかと思うと、さにあらずで、「俳句十首」として、旧派の吟が並んでいる。前書に「こは旧派の吟詠なり。既刊第三号に掲載すべき筈なりしが、笹の家氏多忙にて去一月中旬漸く選抜を終り、本会宛にて送られぬ。此中別天氏の撰ばれし句ありて二度掲載の分もあれど、旧派は自ら新派と見を異にするを以て特に掲ぐること、なせり。吾人は素より新旧両派に対して厚薄の待遇を為すものに非ず、故に今後新派は別天君に旧派ハ笹の家君に選抜を囑して充分両派の長所を發揮せしめ、斯道の發達を計らむとす、旧派諸子、請ふ此意を諒して続々投吟せよ 俳欄記者識」とある。この記者は、新、旧派を平等にとり扱い、両派の長所を發揮せしむることが俳句の發展につながると思つていたのである。このことは、大阪俳壇が今なお旧派を無視できない状

況にあつたことを物語っている。明治三十一年六月の「ほととぎす」十八号に出した野田別天楼の「大阪俳壇の近況」にも、「卑俗殆んど笠付と擇ぶなき月並的俳句は表面こそ目覚しからざれ、割合流行致し居り候」と言い、「此の滔々たる俗中にありて俳句の文学的研究をなすものは、唯大阪満月会あるのみに候」と述べている。さきの「俳句十首」は旧派俳句の作法通り上客、軸、秀逸に分けており、次のようなものであつた。

上位三客

行く秋や物悲しげに鳴く小鳥 青麟

軸

是にさへ秋の寂あり花野原 湖暁

秀逸

世の塵を籬に避けて菊の主 蘭友

これらの句と次の別天楼選の句と比較するとき、旧派の句の如何にその趣向の陳腐なるかが明瞭となる。

片町や蒲団干したる小さき家 孤村

家二軒深雪の中に灯ともせり 邃月

掃き寄せし焚火の跡や朝の霜 閑鷗

俳欄記者が「充分両派の長所を發揮せしめ、斯道の發達を計らむす」とか、俳狂生が「浪華俳壇は旧派全盛の姿なれば此際我會員中

より新派の風雲児を生み出してこゝに新旧兩派折衷の適當なる短詩形を得るは本会の企図すべき新事業」(第一卷第二号「希望のかずく」と信ずと書いたにもかかわらず、第二卷第二号以下笹の家宗匠の旧派俳句が掲載されることがなかつたのは、先の理由に拠ると思われる。

『よしあし草』第二卷第二号(明治三十一年三月)は、蝸牛会俳句と春季雑吟の他に、大阪満月会の生み親ともいうべき水落露石の「梅二十句」が掲載されている。「梅四五本に月上るなり岡の宮」「牛吼て梅ちりかゝる堤かな」といったもので、平淡にして典雅な作である。また「一題三句」に松瀬青々の句がみられる。「黄昏や梅に灯ともす岡の家」「春雨や碁石こぼる、青暈」「雉子鳴くや湖の日くもる竹生鳥」といった情緒あふるる絵画構成の句である。青々は明治三十年十二月十七日の新聞『日本』に初めて、その句が載つたが、『文庫』では選者の虚子に認められ、『ホトトギス』でも、子規、鳴雪、虚子、碧梧桐から高い評価を得ていた。子規は「明治三十一年の俳句会」(『ホトトギス』第二卷第四号)において「昨年に在りて著しき進歩を現わしたる者、東京に五城あり、越後に香墨あり、大阪に青々あり。青々の句は昨夏始めて之を見る。而して始めて見るの日既に其堂に上りたるを認めたり」と評した。その松瀬青々、それに、水落露石、野田別天楼等の日本派の俊秀が『よしあし

草』を發表舞台にして、誌面が日本派一色に染まろうとしていたとき、第七号（明治三十一年七月）になると、別天楼をはじめとする日本派の俳人たちがまったく見えなくなってしまい、俳句欄は寥々として、旧派調の俳句をつくる奥野蘭友その他三人ほどの句が並ぶのみとなった。次の第八号（明治三十一年八月）は、第六号で募集広告をした兼題の「蝸牛」と「蓮花」を詠んだ蝸牛会々員の句が並ぶが、リーダーとしての別天楼の句がなく、選も彼ではないようである。また、第六号では、蝸牛会として句と会員を募集していたのに、第八号の蝸牛会次号兼題「短夜（明け易し）萍の花」の募集元はなぜか青年文学会となっており、以後、蝸牛会の名はどこにも見ることがなくなる。第九号（明治三十一年十一月）も俳句欄はまったくふるわず、夢遊生、寥星といった人々の句が並ぶのみである。第十号（明治三十二年二月）は、高須梅溪上京のゴタゴタからか、本文わずか四頁のもので、詞藻欄には、拙劣という他ない俳句が並ぶのみである。^{①7}ここには、本部報告として、十二月一日午後五時から例会が催され、河井醉茗が参加し、会の根本的改革が議せられ、その結果、堺支会の創立、本誌の革新、編輯庶務会計の改選がおこなわれたとある。このおり、新体詩、和歌、俳句の募集と選は堺支会ですることになったらしい。この第十号の表紙裏に懸賞募集があり、俳句は兼題として「若草」とある。投稿所は浪華青年文学会と

なっているが、前に述べたように、堺支会の担当であったと思われる。なぜなら、第十号（明治三十二年一月）に「当支会第一回懸賞募集はメ切時限余りに切迫せしと時や師走の最も多忙を極むるの際なりし故応募原稿少数なりしを以て全くこれを中止せり」とみえるからである。第二回の懸賞募集は、メ切を本月中に延期し、歌（羈旅）は選者を伊良子清白、俳句（若草）は「東京の斯道の大家」、新体詩は河井醉茗に依頼したとし、募集範囲は当支会のみならず、広く本会としたので「続々金声玉振の佳什を寄送あらんことを望す」とあって、第十一号（明治三十二年二月）には、懸賞課題俳句が披露されている。東京の大家とあつたが、酔茗の別号ちぬ男選であり、春季雑吟の方も酔茗選と思われる。彼自身も「若草や萌ゆるまもなく焼かれうぞ」の句を出しているが、月並句としか言いようのない作である。

俳句欄不振の現状に新派に心を寄せる会員から、次のような投書がなされている。「俳句欄の寂寥甚しきは如何、別天楼は何をなしつ、あるや、疑星、孤村等錚々の士は、早くも隠居し給ひしよな」（「来者不拒」俳狂生^{①8}）日本派の再登場を熱望する声が出て来たといえよう。また、同じ号に、「神戸支会諸子の発起にか、れる新派俳句の一団体」の青葉会が誕生した報告が出ており、「其成句は追て本誌上の現はるべし」とあり、この新派俳句会も『よしあし草』俳

句欄の寂寥さを補うべくなされたものであろう。こうした動きを考慮してか、第十二号（明治三十二年三月）の第四回懸賞募集の選者として河東碧梧桐が登場している。堺支会は、というより酔茗が何故、碧梧桐を起用することにしたのか。その理は判然しないが、碧梧桐は子規に明治三十年の俳句界において、最も進歩著しき者とされ、三十一年には「碧梧桐の老練にして適勤なる」と虚子と並んで「天下敵なき者」という最大級の褒辞を得ていたことや、同年三月に出版された日本派最初の総合句集『新俳句』（上原三川、直野碧玲瓏共編、正岡子規閲）で、子規の五百二十一句の入集について、碧梧桐は二百八十二句にのぼった。（ちなみに虚子の入集句は二百三十二句である。）これら碧梧桐の精進や実力が選者として登用された理由ではないかと考えている。

碧梧桐の選者登用が出た第十二号に「今後新俳詩、和歌、俳句等の投稿に限り（懸賞とも）堺市北旅籠町河井醉茗にて御発送あるべき事」と韻文は堺支会の分担であることを明言している。既に第十号からこの方針で来ていたのだが改めて全会員に宣言したのであった。そして、第十三号（明治三十二年四月）に、懸賞を廃して「御投寄の玉件は一に之を左の諸選者に托して厳密なる詮衡を經、本誌に登載致す事と相定め候」との至急広告が出ている。この号は日本派俳句会の大坂満月会が登場し、神戸の青葉会が句を載せ、堺の北

斗会が名乗りをあげている。大阪満月会は青々、孤村、橡面坊、小刀、瓦全、疑星、別天楼と名だたる俳人が出句している。青葉会は齋藤湊舟が中心になって結成された。湊舟は日本派俳人で、神戸の『又新日報』の記者であり、この例会で得た秀句は彼の新聞紙上に掲載され、後に評釈を加えて『俳句狸毫小楷』として関西青年文学会から出版された。北斗会は潤月、鉄南、雁月、秋月、ちぬ男といった堺支会の主要メンバーで、新派に賛同しているが、日本派ではない。例会にたまたま会を結ぶことになったらしい。「蚤の子もすなる俳句といふもの作りてみんと何事にも浮名立てらる、ちぬの浦の七人男とやらん五人男とやらん春宵一刻のはしなきまとみにか、るものこそ詠み出にけれ」と前書きがある。この五人は和歌にも熱心で三月二十二日高師の浜に与謝野鉄幹と会して、それぞれに歌を詠み、^①「はまゆふ」と題して『よしあし草』載せていた。^②他に「俳句五目ならべ」と題して、大釜菰堂と伊良子す、しろのやの作が載っている。菰堂は京阪満月会が京都の華頂山下に第一回の集会を開いたおりからの満月会のメンバーで、第十三号に堺支会入会の報告がみえる。日本派俳人として京都俳壇に知られたこの人物には特に筆をそえて、「在京都大釜菰堂君は新に本会に入りて大に尽力せられんと言ふ囑望する處多し」と記している。菰堂の句は「奇警奇抜、気のきいたと言ふ方であるが、成るべく趣味を広くとろうと心掛け

てゐると見へて、時には滑稽、稍縦横なものだ」と評されるが、五目ならべに載せる「白魚を酔に浸したり浅き皿」や「雛棚の菱餅炙る四日かな」が孤堂俳句の特色を示すものであろうか。すぐしろのやの俳句は、文庫派代表詩人の作としては、詩情なしとせねばならない。「接木して昼飯した、む勞れ顔」「花見るに指を啣へて愚なる顔」といった陳腐極まる作が並んでいる。彼が選した第三回懸賞募集の披露がなされ、天「後になりて軍医桜を手折る哉」堺澗月、地「両側のさくらの雨や人三五」東京稜々、人「ゆらくとひけばこぼる、糸核」堺ちよ子の句が並ぶが、どこに詩情があるのか解し得ない凡作である。

第十四号（明治三十二年五月）には、第十二号で広告した懸賞募集俳句「更衣」の碧梧桐の選句が並び、天「綿ぬきや粥の湯す、る貧の朝」河内酔茗、地「拝領の御紋古りたる更衣」神戸ふね子、人「衣更へて駒に乗りたる烏帽子哉」岡山梅瘦が入選作となっている。酔茗が天となっているが、理屈におちた句と思われる。地と人の句はあまりにも古風にすぎない。この号で見るときは、青葉会で、京都から石井露月、大阪から別天楼、青々が参加して開かれた連座の報告が出ている。十四名の集まりで、午後五時から、連座十題を課し散会したのは午前三時であったというから、日本派の実力俳人を迎えて熱気あふれる会となった模様である。「葉柳や水ひたく」と出

町橋「露月、露置くや赤き薔薇の蕾がち」別天楼、「武家町や薔薇花咲く女医が家」青々が、その夜の収穫であった。他に笠雨の「夏の句」が十五句、神戸の木魚庵、堺の無縫の四句ずつみえる。右の笠雨も溪舟と並んで神戸の俳壇のリーダー格で、二人の指導によって、七葉会が誕生した。第十五号（明治三十二年六月）に七葉会とその母体の青葉会、行餘会が句を発表しており、他に橡面坊が十句若竹集という題で載せている。

第十六号（明治三十二年六月）は、青葉会臨時会の句が冒頭に出る。同人の笠雨が和歌山へ帰郷することとなったための送別会を兼ねた会であったという。この会には、大阪三日月会の青木月兎が出たとある。三日月会は、三十一年の秋に月兎、鬼史、北渚三人が中心となって結成したもので、三十二年一月に金尾文淵堂から刊行された『ふた葉』をこの句会の発表機関としていた。この雑誌に集まる人々によって文淵会が組織されていた。月兎が来たのは、十月から刊行予定の三日月会の機関誌『車百合』の会員獲得のための意図があったのではなからうか。その他、此花会という新派和歌俳句会が結成されて、その第一回の会合がおこなわれた報告が出ている。会員の無人、青麟、夢遊は青年文学会本部に所属し、滴翠、北邸、南泉は蘆葉団に属していたという。このグループは青年文学会の第六支部で、本拠を大阪南区難波新地三番五十七番におき、岡本玉風、

後には大槻泡沫（月啼）が代表者であった。

第十七号（明治三十二年八月）は、『紅蓮白蓮』と名づけた「其外粧を更め其内容を整へ」て、「明治文壇の明星たり木鐸たる先輩諸家の鉅篇名什を網羅し加ふるに青年諸子が苦心經營の余に成れる美文韻文を蒐収」したという夏季特別号、泉鏡花、与謝野鉄幹、江見水蔭、戸澤姑射、久保天随、巖谷小波、小島鳥水、滝沢秋暁等が寄稿し、関西文学会員としては、中村春雨と河井醉茗、堀部靖文、神戸支会の一色白浪が横瀬夜雨と合作の「雁語槽書」を載せている。

この号の発行兼編輯人は靖文堀部卯三郎であるが、印刷人は東京神田区の真形隆吉（真形活版所）となっており、東京で印刷されたことを示している。赤刷りの広告には新声社出版書籍目録が七頁にわたって出ているところから、『新声』記者の高須梅溪の企画によってなされたものであろう。会員には好評で、『紅蓮白蓮』未だ細読はしないが、鉄幹の傘の内と烏水の蚊遣物語とは兎も角もおもしろく読んだいづれ細評は次便に（暁雲）、『紅蓮白蓮』はなか／＼の好冊子ですか、るものを出された幹事さんのを多謝したし（白面楼）といった投書がみられる。

さて、この号には、京都満月会が参加し、京都の日本旅の重だつた俳人、露月、青嵐、瘦石、虚吼、煙村、非無、杜葉、黄波、魁、四明の句が並んでいる。さらに、露月選の北斗吟社の句が掲載され

ている。この会は、遠く秋田の能代で、島田悟空（五空）が結成し

た日本派の結社で、石井露月を指導者におおいでいた。明治三十二年四月、中川四明宛の子規の紹介状を持って京都へ来た露月は、五月五日から祇園社畔の東山病院へ四明の斡旋で勤務し、京都満月会の連座に参加していた。^⑤その縁で『よしあし草』への「北斗吟社」の登場となったのであろう。「涼しさの窓にせまるや草の丈」悟空、「雨乞の幣かつぎ行く村の衆」江南、「磯村や背戸に出づれば麦の秋」南圃といった田園生活を叙した佳句が多い。また、白鷺会という姫路の俳句会が登場する。小橋の句があることから、姫路支会の会員によって生まれた会らしい。小橋は本部会員の小林天眠のことで、故郷の播州の北条町へ帰っていたのは、大阪に自分の店を持つ準備のためであった。酔者たちの、堺の北斗会同様に、日本派俳人の居ない、新派同好者の会といえる。しかし、この会も後には日本派俳人の牛耳るところとなったようで、『軍百合』第八号（明治三十五年五月）では、月兔、鬼史といった大阪三日月会の俳人の名がみえる。その他、神戸の青葉会、和歌山の更衣会がみえる。

第十八号（明治三十二年九月）の「來者不拒」という「はがき投書」欄には、「本誌俳句欄の寂寥なるは如何宜しく文渾会の諸に乞ふて投書させては如何別天楼孤村は何地へ消えしか両氏文学会を見捨てたるか如何此稿掲載被下度願上候」（八月十六日俳醉人）、別天

樓の句がみえたのは、第十三号の大阪満月会の作品中で、以後はさまざまな俳句会が誕生しているが、彼が加わっている様子はない。孤村も同様である。別天楼、孤村と青年文学会にあって、新派を鼓舞した鈴木疑星は六月六日に亡くなっていった。日本派の斎藤溪舟に率いられた神戸の日本派は結成以来、毎月その作品を掲載していたし、堺の北斗会も作品を発表していたから、俳句欄必ずしも寂寥ではなかったのだが、日本派の実力作者別天楼や孤村が見えないことが、不満足であったのだろう。右の投書に答えて「別天楼とは離縁しません次号からは店に出しますから可愛がって下さい」（一記者）とある。そして、表紙裏の「注意」に「俳句は本号より斯道の名家に依頼して撰抜を乞ふこと、なりたれば成るべく多く投稿あらんことを望む」とあり、第十九号（明治三十二年十月）をみると、秋季雑吟に久々に別天楼が末尾に五句載せているところを見ると、彼が選をしたと思われる、「斯道の名家に依頼」という予告は、別天楼の再起用に落ち着いたことが判明する。別天楼の登場に呼応するかのようには、大阪三日月会が碧梧桐の句を先頭に、露月、青々、小刀、秋窓、月兔、鬼史、橡面坊、井蛙と三十二句並ぶのは、壮観という他ない。第十八号以下『よしあし草』が終刊になる第二十六号までに登場する俳句会を拾うと、青葉会（18、20、21、22、23、25、26、アラビア数字は号数）更衣会（18、20、22、24）、北斗会（18、19、

20）、三日月会（19、23）、行餘会（19、20、21、23、26）、白鷺会（19、21、22、23、24、25、26）、四川会（19）、和風会（19、21、22、24）、白衣会（19、20、21、22、24）、三十六峯会（20、22、24）、京都満月会（20）、白露会（20）、三白会（20、25）、有声会（20、21、23、24、25、26）、菊壺会（22、24）、前垂会（23、24、25）、芦風会（24）、嫩葉会（25）、清友会（25）、碧吟社（24、26）。右の俳句会で『よしあし草』にその結成の経緯がみえるものに、京都の三十六峯会がある。第二十号（明治三十二年十一月）の京都支会報告によると、「一に新派俳句の研究に資し、尚益進んで支会隆盛の実を挙げんこと」を目的として起こした会であるという。この号に句を載せているのは、大釜孤堂、徳美愛桜子、真下垂水、古島晨景、大里茶仙等で、孤堂が中心になって結成にまではこんだのであろう。垂水、晨景、茶仙は支会の幹事であった。また、芦風会というのは第二十四号（明治三十三年三月）の「来者不拒」によると「本部の評議員諸君が、ある希望の為に発起となり」組織されたものであったという。本部会員でかつて作っていた蝸牛会が、消滅してしまった現在、それに代わるものとして作られたのであろう。本部評議員の小林天眠、浅井深水、溝口彩霞、筒井夢遊等が参加している。

さて一章で述べたごとく、中村梟庵、小林天眠、西村酔夢によつ

て刊行された『関西文学』の俳句欄をみると、雑吟は第一号から第六号まで、野田別天楼選で、彼自身も「冷十句」(第三号明治三十三年十月)、「相模十句」(第四号明治三十三年十一月)、「柚味噌十句」(第五号明治三十三年十二月)等、数多く発表している。青木月兔も「角力十句」(第四号)を発表して、別天楼に協力している。

『関西文学』六冊にみえる俳句会は、落葉会(1、2、3、4、5、6)、有声会(1、2、3、4、5、6)、青葉会(1、3、5、6)、白鷺会(1、3、5)、紫溟吟社(1)、蜚子庵小集(1)、和歌山支会(2)、五清会(3、4、5)、碧吟社(4)、みるめ会(4、5、6)、四星会(5、6)、銀河会(5)、伴月会(6)となる。『よしあし草』、『関西文学』にみえる俳句会を地域ごとに分類すると、次のようになる。

大阪 大阪満月会、有声会、此花会、三日月会、四川会、前垂会、芦風会、落葉会、四星会、蝸牛会。

堺 北斗会、行餘会、四世会。

神戸 青葉会、小雨会、嫩葉会、七葉会、みるめ会。

明石 伴月会。

姫路 白鷺会、三白会、白露会。

龍野 五清会。

京都 京都満月会、三十六峯会。

和歌山 更衣会。

備中高梁 白衣会。

静岡 菊壺会。

東京 清友会。

秋田 北斗吟社、碧吟社。

熊本 紫溟吟社。

和風会、銀河会は不明。

○印は『軍百合』地方俳句会、×印は『ホトトギス』地方俳句会に名のみえるもの。

以上、第二章では『よしあし草』・『関西文学』の俳句欄の消長について繁雑にすぎると思われるまでに、事実即して述べてきた。これで、ほぼ雑誌の俳句欄の実態がほぼ明らかになったと思われる。

三

『よしあし草』・『関西文学』俳句欄の流れを辿るとき、旧派と新派を折衷することによって、明治の青年文士たちに相応しい俳句を生み出そうとする一時期があったことをみた。明治三十一年の『都新聞』の「俳諧十傑」をみても、最高は旧派俳人の老鼠堂永機で三万四千四百六十一票、次点はやはり旧派の蕉露庵蕉露で三万三千七

百二十五票、新派の驍將正岡子規はわずか千十六票であった。^②世の潮流は旧派が依然として力を有していたのであった。そうした雰囲気の中にあつて、冒頭のような考え方を持つことは当然の帰着であつたろう。しかし、新派の野田別天楼が選者となり、日本派の俳句が陸続誌上にあられわれ、例会等で彼の指導に接するに及んで、その新鮮さ、優れた文芸性には旧派は到底及ぶべくもないことを知り、俳句欄は新派一色になつた。

しかし、右のような流れの他に、新派 \parallel 日本派の創作傾向に深い共感を示しながらも、俳句も小説や新体詩や漢詩同様に一個の表現形式であつて、日本派といった派閥を形成し、他を排斥するのを嫌悪する一群もあつた。

「頃日新派の句をやる何々会とか称する連中の、主立てる二三人の人はさうでもないが、二流以下の輩に至つては、行く處氣焰とやらを吐き散らして、当る處難倒すと云ふ勢であるが、全体新派をやるにはあれ程えらそうにせんければならぬのですか（弱虫）」（「来者不拒」第十六号）の憤懣は右のグループのものであろう。別天楼が一時期『よしあし草』俳句欄を去るのは、両派の確執によるものではなからうか。後者の代表は河井醉茗であり、彼のよき詩友伊良子すゞしろのやであり、堺支会のリーダー河野鉄南、宅雁月、岡本潤月等であつたと思われる。堺支会で韻文を担当し、醉茗やすゞし

ろのやは俳句にも熱心にとり組んだようだが、新体詩ほどの成果はあげ得ず、会員からの不満も出て、やがて懸賞俳句選者として河東碧梧桐の起用になつた。彼が選者となつたのは、既に述べた理由の他に、関西の日本派 \parallel 主として大阪満月会の勢力下に入ることを避けたものと思われる。しかし、「僕は切に望む俳句欄なり河東先生無論悪しきに非ず然れども関西人なきや曰く青々曰く別天楼あり（俳狂）」（「来者不拒」第十四号）の声も出て、再び別天楼の起用となつた。

醉茗は俳句を「短く小さな詩形にも其印象を明らかにし其時間の働きを捉ふれば、画趣情趣両ながら無限の感興を起さしむるもの」と言い、その功用は「俳句は耳に入り易く、口に吟じ易い平民文学であるから、庶衆に近時の新思想を注入する手段として、価値が高い」ところにあるとする。庶衆には紅葉露伴を与えても、その趣味を咀嚼することは困難であるし、和歌新体詩の類も耳遠いものであると考えられるからだといふ。^③当時の青年文学者の一致した大阪観は「理想無く識見無く又宗教ある事なき」（第一号、時文）^④土地ということであつた。その大阪人士に新思想を理解させるのに、最適なものは俳句である、なぜなら、俳句の持つ庶民性が、高尚な和歌新体詩よりも、大阪人に親しみを覚えさせるからであるといふのである。

ここでも酔茗は俳句は短詩ではあるが、大文学に比敵する感興を盛り込めるといつている。この考えにもとづく故に、『よしあし草』で、ちぬ男、無縫と号し、みずから俳句の選をし、新派の北斗会を主宰し、多くの作品を自信をもって発表しつづけた。彼にとつては新体詩も和歌も俳句も同じ価値を有するもので、日本派のように、俳句のみを尊重し、自派を特別視する行き方ではなかった。

関西青年文学会の青年達がライバル視した金尾文淵堂の『ふた葉』が青木月兎らの「三日月会」の発表機関の如き様相を呈し、地方の俳句会にいささかも関心を示さず、その後身の『小天地』が、鳴雪、虚子、露月、繞石、四明、露石、月兎等の著名な日本派俳人の句のみを載せて、地方句会に頁をさかなかつたのに対して『よしあし草』・『関西文学』があるかなきかの縁によって、雑駁なまでにさまざまな地方句会の俳句を載せたのは、さきに述べたように、酔茗の文学観によるものであり、また、「関西青年文壇の振興」（関西青年文学会規程）に貢献すると考えたからであろう。酔茗東上後も、彼の編集方針は、小林天眠、中山梟庵、西村酔茗に引きつがれていったのであった。

注

① 『よしあし草』第一巻第一号「発刊の辞」。

『よしあし草』の俳句欄

② 「浪華青年文学会について」小林政治『立命館文学』（昭和十三年一月・三月号）抜刷。

③ 「秋声会」『俳句辞典 近代』松井利彦編（昭和五十二年十一月十五日桜楓社）。

④ 『明治俳壇史』村山古郷（昭和五十四年三月十日 角川書店）。

⑤ 「本会の将来」会頭中尾篤夢『よしあし草』第一巻第二号（明治三十年九月廿五日）。

⑥ 『明治大正大阪市史』第一巻 概説編 五 雑誌（昭和四十一年三月三十一日大阪市役所）。

⑦ 「日本派」『現代俳句大辞典』安住 敦他編集（昭和五十五年九月二十日 明治書院）。

⑧ 『近代文芸史論』高須梅溪（大正十五年五月廿五日 日本評論社出版部）。

⑨ 『俳壇回顧』四明老人『懸葵』三月号（大正四年三月一日）。

⑩ 『大阪俳壇の過去及現在』青木月斗『懸葵』二月号（大正四年三月一日）。

⑪ 『現代俳壇諸家略年譜』『現代日本文学全集』38（昭和三年 改造社）。

⑫ 『子規時代の人々』亀田小帖 俳誌「うぐいす」社（昭和四十二年一月二十日）。以下、新聞「日本」への初登場の年月日は、この著書による。

⑬ 『俳句大要』正岡子規、明治二十八年中の『日本』に発表、岩波文庫による。

⑭ 『現代俳句大辞典』による。

⑮ 『雪ちらく／＼霞ばらく／＼ 困舞ふ』はしための眸をなめて泪かな」といった作。

⑯ 『よしあし草』第十一号。

- ⑲ 「明治三十年の俳句会」。
- ⑳ 「明治三十二年の俳句会」『子規全集』第五卷俳論俳話二（昭和五十一年五月十八日 講談社）。
- ㉑ 前掲の亀田小帖の著書による。
- ㉒ 「三月廿二日与謝野鉄幹氏と高師の浜に会して大に詩を語らふ、初めて敷津の浦に氏と見えしは幾年の昔なりけむ、夢なつかしき浪の音に感興湧くが如く吟情抑へ難し、席を同ふせしも鉄南雁月泉舟秋雨の諸子あり、氏先づ歌へらく「酔茗生。「はまゆふ」前書。
- 2 3 「京都通信」京男報、『よしあし草』第二十三号（明治三十三年二月三日）。
- ㉔ 『よしあし草』第十八号、「来者不拒」（はがき投書）。
- ㉕ 『俳人石井露月の生涯』福田清人（昭和二十四年三月二十五日 講談社）。
- ㉖ 『子規全集』第五卷の「参考資料」による。
- ㉗ 「先づ俳句より注入せよ」「時文」「よしあし草」十三号。
- ㉘ 「大阪人士と文学」時文 すね男『よしあし草』第一号。
- なお、『関西文壇の形成』明石利代（昭和五十年九月二十日 前田書店出版部）を、種々な点において参照させていただいた。感謝の意を表しておきたい。

（一九九〇・九・二八）